

ユートピアは空想か？—共産主義批判—

武田光史

I

“空想”とは字義通りに解釈すれば、“空っぽで空しい想い”という非常に否定された意味となり事実またその通りであるが、他方“ユートピア”とは語源的には“どこにもない所”という意味であり一面では空想的要素を有しているにしろ、むしろ積極的で肯定された意味を含んだ言葉となっている。従ってユートピアと空想とは区別されなければならない。また今日ではすでに普通名詞と化しているこのユートピアという概念を生み出す起因となったトマス・モアの著『ユートピア』は、理想とすべき社会・国家像についての架空の物語を描写した文学作品であり、¹⁾文学もまた空想的要素を含んではいるが空想とは全く別のものである。文学は空想であるなどと切り捨てられてはならないのと同様に、ユートピアが空想と同一視され軽視されてもならないのである。

フリードリッヒ・エンゲルスは1876年から78年にかけて、オイゲン・デューリング氏の社会主義理論を批判するために、『反デューリング論』を書いた訳であるが、その中よりドイツ国民以外には直接関係のない3章（1. ユートピア的社会主義 2. 弁証法的唯物論 3. 資本主義の発展）を抜粋しパンフレットとしてまとめ、フランス国民のためにまず最初フランス語訳で発行した。そして日本における最初の翻訳は堺利彦による英語版からのものであり、²⁾彼は *Socialism: Utopian and Scientific* を日本語に訳すに際して、ユートピアという字句に空想という言葉を用いたのである。以来、今日に至るまで、特に我が国においては、ユートピアは空想に貶められたままとされているのが実情である³⁾

またこのパンフレットの中でエンゲルスの言及している偉大な社会改良家でありユートピア的社会主義者であったサン・シモン、フーリエ、ロバート・オーウェンの3人は、果して単なる空想的社会主義者にしかすぎなかったのだろうか。

……ユートピア的なものの完全な消滅は全体としての人間生成の形を変えさせてしまうであろう。ユートピアの消滅は、人間自身が物になってしまうような、静止した即物性の状態を引き起こす。……ユートピアのさまざまな形態を放棄するにつれて、歴史を作ろうとする意志を失い、それとともに歴史を洞察する力をもなくしてしまう。⁴⁾

とマンハイムがいみじくも語っているように、未来を展望し切り開くためのユートピアの見失なわれた——いやむしろ危険性を孕んだ反動化の時代と言ってもよい——今日の状況の中にあって、サン・シモン、フーリエ、オーウェンという3人の偉大なユートピアンをも含めて、科学の名のもとに空想にまで陥れられたユートピアの誤解をとき復権をも試みてみたい。

II

まずトマス・モアの『ユートピア』についての記述であるが、パンフレットの第1章「ユートピアの社会主義」の中ではごく簡単に「……16世紀及び17世紀には理想的社会状態の空想的描写があり……」⁵⁾と触れられており、それにエンゲルス自身による「たとえばトマス・モア『ユートピア』〔「どこにもないような世界」の意〕(1516年)、カンパネラ『太陽の都』(1623年)がそれである。」という注釈が付されてあるだけである。このように『ユートピア』についての過小評価は残念ではあるが、むしろこれは当然なことであり、エンゲルスは第1章でモアの『ユートピア』について述べるのを目的としたのではなく、理性主義に基く啓蒙思想家たちに始まる社会変革運動というものを歴史的に把え、最終的には科学的社会主義誕生の前夜でのユートピア的社会主義者サン・シモン、フーリエ、オーウェンについて述べることを意図していたのであり、事実この3人についての記述が第一章の大半を占めている訳である。

サン・シモンはフランス革命の激動の最中に^{さなか}生き、階級闘争史観を確立し、国家の廃絶をも訴えた。フーリエもまた、商人の子として生れた体験を通して産業社会機構での諸矛盾を凝視し、エーゲルにも劣らぬ弁証法を駆使して科学観的社会運動法則の発見に努めた。この2人がフランス革命の子であるとするならば、オーウェンはイギリス産業革命の申し子であり、彼はいまだ未熟な成長過程にある資本主義社会の中で、もろに露呈している諸矛盾を批判し闘争を挑み、労働組合運動を組織し、私有財産を否定し、宗教を批判し、共産主義的共同体の実験をも試み、等々……。ごく簡単で包括的にはあるが、このように3人の残した足跡を眺めてみると、すでにその中にほとんど全てと言ってよいほどマルクス、エンゲルスの打ち出した社会主義・共産主義の理念は包含されているのであり、だからこそエンゲルスは「科学的社会主義」に至る過程としての「ユートピア的社会主義」を批判しつつも重要視した訳である。

「ユートピア的社会主義」を抜きにしては「科学的社会主義」は生れるべくもなかったし、と同時にドイツ観念論哲学の頂点をなすヘーゲルの弁証法、イギリス唯物論の祖と言われるベイコンに始まり『キリスト教の本質』を著し宗教を批判したドイツのフォイエルバッハに至った唯物論哲学、これらを総合・集大成して生れたのがマルクスの唯物弁証法であり唯物史観であった。さらにマルクスは資本主義経済の矛盾を剰余価値説の発見により暴露し、プロレタリアートによる共産主義革命をも唱えた点ではより偉大であったが、マルクスのこの革命思想も、もしレーニンによるロシア革命が果されなかったならば、『ユートピア』を著わさなかったトマス・モアと同様に、その評価はかなり低いものとなっていたであろう。

マルクスの歴史観によると、すべて社会の歴史は階級闘争の歴史であり、人類の歴史もまた現在の資本主義社会よりさらに社会主義社会を経て共産主義社会へと発展し無階級社会に至るという経済的諸関係のみを土台にしての未来決定論であり、これは今日においても科学的社会主義の信奉者たちに絶対視されており、まさに固定化した教条主義以外の何物でもなくなっている。また資本主義社会ではブルジョワジーとプロレタリアートとの階級が対立・敵対して存在するという2元論的発想は、⁶⁾例えば日本での中産階級の増大と国民大多数の中流意識という現実を取り上げるまでもなく、今日ではすでに色褪せたものとなっているのが実情である。従ってまた、マルクスの求めた高度に発展した資本主義社会でのプロレタリアートによる革命、人類の解放という命題も、はなはだ疑わしいものとなっている。にもかかわらず、プロレタリアートによる資本主義より社会主義への革命という教条主義的・排他的イデオロギーにのみ囚われることは、ただ唯物弁証法という名のもとの共産主義宗教かそれとも神を信仰する宗教かの相違だけとなり、ともにアヘンと化した存在以外の何物でもなかろう。であるからこそ、

人間と社会の未来的進行方向についての総体的な見取り図であり、理性と情念のトータルな投入によって生み出される現実超越的、未来思考的な社会の青写真⁷⁾

としてのユートピアの復活、エンゲルスへのアンチ・テーゼである「科学よりユートピアへ」という転換思想こそが必要な時代であり、この人間社会の展望が科学によって、物によって、弁証法という美名の理屈によってのみ解明され切り開かれうるものでは決してあるまい。

III

企業は利潤の追求のみにひた走り労働組合とは言えば賃上げに憂身をやつし、正義も道徳も理念もあったものではない、資本主義という人間が疎外された状況での問題も考えられようが、すでにイギリス産業革命の中でサミュエル・バトラーも感知していたように⁸⁾、科学と科学技術の過剰による満たされた物質文明とは矛盾・反比例する形で失われて行く人間の心。その結果として顕れるのが金にまつわる極要非道な犯罪であり、子の親殺しであり、中・高校生の教師への暴力という日本の現代社会に突出した現象なのである。⁹⁾「人間はパンなくして生きては行けないが、と同時に人間同士の絆としての心をもなくしてはならない」というのは真実であり、従ってまた「どんなに立派ですばらしい人間解放の言葉でも、そこに心がなければ、相手は誰も聞き入れてはくれない」というのも真実である。

イギリスのロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワースは“plain living, and high thinking”を旨としたけれども、自然科学の発達とともに人類の歴史は「衣食足りて礼節を知る」と言われるように、生活面での便利さのみの追求であった。その結果、われわれ現代人はビルの谷間で、自然を失わない、

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky:
So was it when my life began;
So is it now I am a man;
So be it when I shall grow old,
Or let me die!
.....
.....
.....

とワーズワースが謳ったように、空にかかる虹を見て純粹無垢に感動する心をも失わない、よしんば見たとしても“太陽光線が空気中の水滴に当たると屈折して、赤、橙、黄、緑、……と7色に分解し……”と科学的にしか考えることができず、ましてや虹を見る心のゆとりさえも無くしてしまったのである。

またオールダス・ハックスリィは未来小説『すばらしき新世界』(1932年)の中で、科学と科学技術の異常なまでの発達により、人間性を、心を失なった未来世界での人類の姿を描き、われわれの将来に対しての警鐘を鳴らしてくれた。さらに評論『すばらしき新世界再訪』(1959年)において、人間は適度に gregarious(群居的)な存在、すなわち過剰な組織の中では1人になろうとし、また逆に1人になると群の中に帰りたいがるという、いわば我儘な存在であり、個

人の自由が失なわれ組織が過剰になりつつある現代社会の危険性を訴えた。またジョージ・オーウェルは『動物農場』（1945年）において、ロシア革命よりスターリンの独裁に至る過程を諷刺し、さらに『1984年』（1948年）では、スターリンによる全体主義的独裁体制のもとで個人の自由・尊厳がいかにして剥奪され抹殺されて行くかを描いたのである。果して、ロシア革命は、マルクスの予言に反して、後進国革命であったが故に、スターリニズムを生み出さざるを得なかったのか、それとも、たとえ高度に発達した資本主義よりの革命であろうとも、マルクス主義のイデオロギーそれ自体の中に、スターリニズムを生み出す要因を含んでいるのか。『1984年』はこのような重要な提言をわれわれに与えているのであり、ハックスリィの『すばらしき新世界』と同様、未来を思考する場合に必ず引合いに出されるアンティ・ユートピアの文学作品なのである。

さらに人類の未来について考えるならば、何百年先になるか何千年先になるか、予言もましてや断言は誰にもできないけれども、仮りに可能なものとして、「万人の自由な協同社会」となり、さらに「国家の死滅した王国」、すなわち

社会の全員に対し、物質的に十分満ち足り、その上に日に日に豊富になっていく生活を保障すること、それは、さらにまた、彼らの肉体的および精神的能力の完全にして自由な発展と活動を保障する可能性、そういう可能性が今はじめてここにある。それが正しくここに¹⁰⁾ある。

と記述されているようなバラ色で理想の社会・王国が、果して到来するのであろうか。「物質的に十分満ち足り、生活の保障」された暁に人間に残されるものは、「肉体的および精神的能力の完全にして自由な発展と活動が保障」されるどころか、オーウェルの『1984年』に見られるような中央集権的官僚支配という新たな不自由と人間疎外であり、それはまさに「生活の保障された刑務所暮しの人間の姿」であり、さらにまた「檻に入れられた猿の姿」となるのではあるまいか。いやたとえ究極的には保障されたとしても、食うに満足した人間に残されたものは、「後はただゴロリと寝て暮す」という肥えたブタの生活でしかありえないのではなからうか。

IV

「人間とはとらえ所のない存在である」という前提はありながらも、科学により人間の心が失なわれてはならないし、と同時に宗教もまた科学的理性に基いたものでなければならない。

1+1=2 でもって人間存在を全て割り切ってしまうことはできないし、また“……おおへ、神よ、神よ、アーメン”とか“ナムミョウホーレンゲキョウ、ナムアミダー……”とひたすら祈ることによってのみ人間は解放され救われる訳でもなからう。人間は理性の動物であると同時に感情の動物でもあるが、ただ唯物的のみであってまた唯心的のみであってならず、理性と感情の調和した物心両立的存在としての生を求めて行かなければならない。

現代の人間は、科学と科学技術の発達とともにがんじがらめの過剰になりつつある組織の中で生きて行かねばならず、また心は実に空虚で孤立化した状態にあるにもかかわらず、人間お互を結ぶ心を忘れず、現実社会との闘いを通して、未来を切り開いて行かねばならないのである。マルクスの言った“The philosophers have interpreted the world as it is, but the point is to change it.”というのは至言ではあるが、唯物弁証法による革命理論のみが未来を切り開く絶対唯一の手段ではなく、不確実性の時代とか言われるように価値観の多様化した、

いやむしろ価値観の喪失した今日的状況の中にあって、

およそ何らかのユートピアと無関係な革命思想はありえない。いいかえれば、革命思想はつねに何らかの形で社会的ユートピアと結びついているとわたくしは考える。マルクス主義もまた例外ではない。マルクス主義だけではない。社会の矛盾を批判し、これを克服することを課題とする思想や科学は、意識すると否とにかかわらず、つねにユートピアと無関係ではない。あえていうならば、社会にかんする新しい思想、新しい科学の誕生によって、ユートピアはまさに不可欠の前提条件であるといつてよい。¹¹⁾

というみずみずしいユートピアを復活させることから、まず再出発する必要があるであろう。¹²⁾

トマス・モアの『ユートピア』—いや、むしろプラトンの『国家』よりと言った方が妥当であるが—より出発したユートピアの概念は、ユートピア文学、ユートピア思想というジャンルを生み出し、ここにおいてさらに新しい発展・展開が始まろうとしているのである。

そして最後に、我が国のユートピアに関するあらゆる訳書・著書において、“空想”という誤解・曲解を招く訳語より、“ユートピア”という本来の言葉である原語に立ち帰り訳し直していただくことを、我が国のあらゆる訳者・著者の諸兄に対し、この機会に切に要望して、この稿の締め括りとしたい。

（なお、この拙文は、近く翻訳出版予定の『文学とユートピア』への終章（訳者による）の下書きの一部として、書き記したものである。）

【註】

- 1) 詳細については、拙文『トーマス・モアの創造したユートピア』（岡山英文学会誌「ベルシカ」、第8号）を参照されたい。
- 2) 堺利彦自身が発行していた雑誌『社会主義研究』に、1906年7月、初めて翻訳・掲載された。ちなみに単行本としては、1921年が初めてであり、これも堺による英語版からの翻訳であった。
- 3) 現在の訳本——岩波文庫版、青木文庫版、国民文庫版（大月書店）、新日本文庫版、その他——はいずれもドイツ語原版からの翻訳であるが、ドイツ語の“Utopie”は全て“空想”と訳されたままである。なお、『月刊学習』（日本共産党中央委員会発行、1980年8月号）は『ユートピアから科学へ』の出版百年記念特集を組んでいたが、この“ユートピア”という字句は全て“空想”となっており、一字一句たりとも“ユートピア”という言葉を見い出すことはできなかった。ユートピアに対する誤解・不理解は誠に残念で由々しき限りである。
- 4) カール・マンハイム著、鈴木二郎訳、『イデオロギーとユートピア』（未来社、1968年）、282頁。
- 5) フリードリッヒ・エンゲルス著、大内兵衛訳、『空想より科学へ——社会主義の発展——』（岩波文庫、1966年改版）、34頁。なお、この訳書のこの箇所では“空想”に“ユートピア”とルビが打っており、非常に良心的である。
- 6) このような発想は文学においてもしばしば窺われ、例えば H. G. ウェールズは『タイム・マシン』（1895年）の中で802,701年という遠未来の世界を描き、そこでは、資本家階級の末裔である地上生活を営むエロイ族と労働者階級の退化した地下生活を送り夜行性のモーロック族というように人類は2元的に分裂した状態にある。
- 7) 坂本慶一著、『マルクス主義とユートピア』（紀伊国屋新書、1970年）、8頁。なお、さらに続けて「ユートピア思想は、未来については理想主義であり、現実にたいしては批判的である。批判的であることによって現状変革的であり、その限りで現実の動行に無関心ではない。」とある。

- 8) 機械文明による人間疎外という問題を文学で最初に提起したのはサミュエル・バトラーであり、詳しくは拙文『サミュエル・バトラーと彼の著「エレホン」』（中国短期大学紀要第9号）を参照されたい。
- 9) さらに端的な例ではあるが、日本の優秀な製品は世界のすみずみにまで行き渡っており経済的には大国であるのに対して、政治的にはたいした影響力をも行使できない小国であり知的文化の輸出は皆無に等しく、国内に目を向けてみても政治は貧困で知的文化の産物としては例えば低俗な雑誌類の氾濫があり、いかに知性に基いた心が欠如しているかが理解できよう。
- 10) 前掲、『空想より科学へ —社会主義の発展—』、88頁。
- 11) 前掲、『マルクス主義とユートピア』、170頁。
- 12) ささやかながら、その具体的な試みとして、筆者による創作短篇 武岡輝道、「革命する女達」—三部作「未来をめざす女達」その二—（『瀬戸内海文学』第四十号）があるので、参照されたい。